

「第 17 回河川整備計画策定専門家委員会」議事概要

日時 令和 5 年 11 月 27 日（月） 15 時 00 分～17 時 00 分

場所 東京都庁第二本庁舎 31 階特別会議室 23

出席委員（名簿順）	朝日	ちさと	東京都立大学都市環境学部教授
	小野	淳	東京都島しょ農林水産総合センター 振興企画室長
	小堀	洋美	東京都市大学環境学部特別教授
	谷川	章雄	早稲田大学人間科学学術院教授
	知花	武佳	政策研究大学院大学教授
	土屋	十圀	前橋工科大学工学部名誉教授
	山田	正	中央大学研究開発機構教授

議事

- (1) 都における河川整備計画の策定状況について
- (2) 現地視察報告
- (3) 河川整備計画について
 - 内川（変更原案）
 - 目黒川流域（変更原案）
 - 渋谷川・古川（変更素案）
- (4) その他
 - 石神井川上流地下調節池整備事業
 - 今後の予定

(1) 「都における河川整備計画の策定状況」及び(2) 「現地視察報告」について
→事務局より説明を行った。

(3) 河川整備計画について
→各計画の変更内容等について事務局より説明を行った。
以下は委員からの主な意見。

【全般】

- ・洪水時の水位や、下水道から河川への流入量などは観測をして実際のデータを確認すべき。
- ・行政が全てやるのではなく、民間企業による洪水予報システム等をうまく活用してはどうか。

- ・耐震対策事業による浸水を防ぐ効果とはどのような考え方なのか。
- ・民地を使わず、河川のみで治水対策を行うには、膨大な事業費が必要である。総合治水対策として、受益する方に一部を負担させるような取り組みはないか。
- ・内水被害を防ぐには、河川と下水道と連携が必要である。河道整備や調節池だけでなく、公園地下に浸透貯留施設等を整備するなど、面的な対策が必要である。下水道事業だが、河川事業側も促す取り組みをしていくべきである。
- ・津波の想定高さは全河川一律で設定しているのか。沿岸部と各河川では異なると考えるが、シミュレーションを実施しているか
- ・河川事業を進める上では、文化財だけでなく、近代土木遺産についても把握すべきである。
- ・護岸整備やヘドロ対策等においては、新しい技術を積極的に導入すべきである。
- ・洪水対策の目標水準が現在気候か将来気候かについては、わかりやすく表現すべきである。
- ・河道拡幅により、憩いの場や生物の生息などの機能を持たせるといったポテンシャルがある。洪水対策においては調節池の整備だけでなく、河道拡幅による整備など多面的に検討してほしい。

【内川】

- ・植栽には外来種ではなく環境に配慮した在来種を用いるようにしてもらいたい。
- ・「動植物に配慮した整備」「多様な生物の生息、生育環境に配慮した整備」とは具体的に何をするのか
- ・「1時間あたり50mm」は現在気候で概ね何年に1度に相当するのか。
- ・流域全体で概ね50～100年に1回程度の確率で発生する降雨とは現在気候を想定しているのか将来気候を想定しているのか。
- ・環境に配慮した整備にあたり河床に植物を植えたりなどの自然調和型の整備も取り入れてもらいたい。

【目黒川流域】

- ・目黒川の上流側の暗渠区間の調節池の整備状況の進捗は。

【渋谷川・古川】

- ・古川の臭いが気になるため、清流復活事業による導水など対策を検討すべき。
- ・金杉橋から下流の右岸側、JRの線路までが耐震対策区間ではない理由はなにか。

(4) その他

→石神井川上流地下調節池整備事業及び今後の予定について事務局より説明を行った。

以下は委員からの主な意見。

【石神井川上流地下調節池】

- ・ 河川の拡大とは、拡幅（幅を広げる）のことか。地下調節池による洪水容量の拡大、ということか。
- ・ 事業の優先順位はB/C、整備水準はB-Cで評価すべき。そのためB-Cも明記してほしい。

(以上)